

6月23日（日）

ジャパンフェスティバル

ジャパンフェスティバルは、在ハンブルク日本国総領事館、独日協会主催で1968年から毎年開催されているイベントであり、日本から寄贈された5,000本もの桜の木を見ることができるほか、食、音楽、スポーツ、映画など様々な日本文化に触れることができる。また、公益財団法人日本さくらの会主催で毎年「桜の女王」が選出されている。

プランテン・ウン・ブローメン州立公園内の日本庭園で多くの市民が集まる中で、ジャパンフェスティバルのオープニングセレモニーが行われ、和太鼓の演奏のあと、リヴ・アスマン州議会議員、横山市長、竹下議長、戸田在ハンブルク日本国総領事、橋丸独日協会会長からそれぞれ挨拶があり、日本人学校の生徒による合唱・和太鼓の演奏などで盛り上がりを見せた。

オープニングセレモニーのあと、会場内を視察し、ジャパンフェスティバルの出展者や参加されている市民など、多くの方と交流を行った。万博ブースでは来場者へのグッズ配布やミャクミャクによる交流など、積極的に万博のPR活動を行った。また、竹下議長と横山市長が代表して地元テレビ局やラジオ局による取材を受ける場面もあり、ハンブルクでのジャパンフェスティバルへの関心の高さがうかがえた。



（万博ブース）



（地元テレビ局の取材を受ける議長と市長）

【横山市長 挨拶要旨】

ハンブルク市と大阪市は、35年前の1989年5月に友好都市提携を行い、文化・スポーツ・経済など様々な交流を行ってきた。本日は、日本をテーマにした文化、スポーツ、アートなど多様なプログラムが予定されていると聞いている。このように大勢の方々が参加されていることから日本文化への関心の高さがうかがえ、大変うれしく思う。来年には、大阪で万博が開催されるので、ぜひ皆様にも大阪を訪れていただき、新たな大阪の魅力を感じていただきたい。今後も両市の交流が一層発展することを期待する。

【竹下議長 挨拶要旨】

本日は、ジャパンフェスティバルが多くの皆様のご来場のもと、盛大に開催されたことを心からお喜び申しあげる。ハンブルク市と大阪市は、1989年に友好都市提携を行って以来、経済、文化、学術などあらゆる分野での交流を深めており、めでたく35周年という記念すべき年を迎えた。今後は、さらなる発展に努めていかなければならないと考えているので、新たな時代に向けて、両都市の絆が今まで以上に緊密なものとなることを祈念する。また、本日ご来場の皆様には、日本をテーマにした様々なプログラムに参加されることで、より一層日本文化に関心を持っていただき、来年、大阪で開催される大阪・関西万博にもぜひお越しいただきたい。引き続き交流の輪を広げ、40周年、45周年と両市の友好関係がより一層深まることを祈念する。



(多くの市民が集まる中で挨拶する議長)

エルプフィルハーモニー視察及び港湾ボートツアー

エルプフィルハーモニーは、2017年1月にオープンしたハーフェンシティ地区にあるコンサートホールであり、NDRフィルハーモニー・オーケストラやハンブルク交響楽団などの本拠地となっている。「エルプ」はハーフェンシティが面するエルベ川を意味する。

このホールは、建築家ジャック・ヘルツォーク、ピエール・ド・ムーロン、アスカン・メルゲンターラーによって設計されたものであり、音響設計はサントリーホールなど国内外100以上のホールの音響を手掛けた日本の豊田泰久氏が担当した。

建物は、26階建て、高さ110m、総床面積12.5万㎡で、総工費7億8,900万ユーロ（当時のレートで約1,046億円）であり、もともとあった古い倉庫を土台にし、その上にガラス部分を載せて建設するという現代の建築技術を駆使した壮大な建築物である。倉庫とガラス部分の間の8階は「プラザ」と呼ばれ、カフェや展望デッキも設置されており、ハンブルクのまちを一望することができる。コンサートホールの下の倉庫部分は駐車場として活用している。

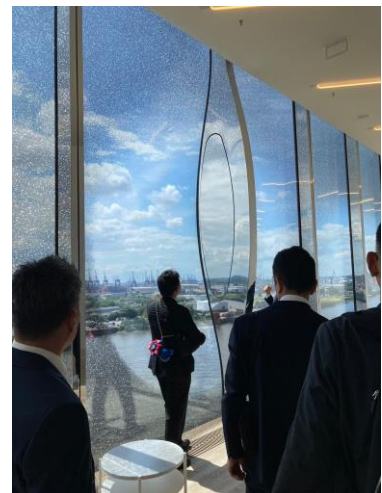
エルプフィルハーモニーの視察後、エルプフィルハーモニー前からボートに乗船し、HPA（ハンブルク・ポート・オーソリティ）のダニエル・ヤン氏の説明により、エルベ川を下り、川沿いの集客施設などのまちの様子を視察した。その後、物流を中心としたエリアを航行し、コンテナ船の荷役の様子やコンテナターミナルなどの港湾施設を視察した。

【エルプフィルハーモニーの説明概要】

エルプフィルハーモニーはもともと建築期間が3年の予定であったが、最終的に10年かかってしまった。古い倉庫の上にコンサートホールを建てるのに規制があり、新築で進めることができず、あくまで古い倉庫を改築するというかたちで進められたプロジェクトである。

エルベ川には、エルプフィルハーモニーの14階に匹敵する高さのあるコンテナ船が通るので、14階までは船からのレーダーに察知されやすい素材でつくるとというのが条件であった。その条件をクリアするために開発された素材がこの窓である。この窓は金属を入れてつくられている。

また、火災が発生した場合、通常のコンサートホールよりはるかに高い位置にあるため、この高さで窓を開けて換気するという挑戦的なシステムが必要であったが、ガラスと金属を交えることによって強度が増すので、強い風にも耐え得るうえ、このような特徴的なデザインも可能となった。



（さまざまな工夫を行っている窓）

また、この窓ガラスは4層で5 cmの厚みがあるが、大きなコンテナ船が通って汽笛を鳴らすとコンサートホールの中まで聞こえてしまうのではないかと、逆にコンサートホールの音が外に漏れてしまうのではないかとという懸念があり、外からの音も中からの音も遮断しなければいけないという課題があった。これは、コンサートホールの建物の中にもう一つ殻が入っているような形の構造にすることで解決した。その殻の外側にはダンパーが付いていて、外の建物によって支えられているので、コンサートホールが満員になると、コンサートホール自体が実際に6～8 mm程度沈む。

このコンサートホールの特徴としては縦長であること、そして指揮者と観客の距離が近いことである。音源がどこにあるのか、音がどこに反射するのかなど音響効果としては緻密に計算された上で、コンサートホールのどこに座っていようが、よい音響効果が得られる設計であり、自由ハンザ都市ハンブルクの「上下関係のない」という考え方がここにも生かされている。

また、ステージが真ん中に設置されており、一番遠い席でも指揮者までの距離は30 mを超えない。一般的なコンサートホールでは75mぐらひはあるので、ここは音源にとっても近いコンサートホールである。それゆえ、静かな音でもすべての席に伝えることができる。その反面、例えば一番うしろの席で誰かがキャンディを開けたら、その音もすべての席に聞こえてしまう。

なお、内部のデザインは溶岩をモチーフにしている。



(エルプフィルハーモニー外観)



(エルプフィルハーモニーでの説明)



(特徴的なコンサートホール)

【港湾ボートツアーでの説明概要】

ハンブルク港の強みは、都市部に近いこと、また大型のクルーズ船が寄港できるバースが3か所あることである。

視察時に停泊していたピンク色の大きな貨物船ONE（オーシャン・ネットワーク・エクスプレス）は、日本の大手海運会社3社が合併してできた組織が運航しており、全長400m、35万トンのコンテナを積むことができる。



（貨物船ONE）

2005年まではハンブルク経済省がこの港湾の土地を管理し経営も行っていたが、効率を上げるために2005年にHPAという会社を設立して管理を行っている。HPA設立とともに土地の権利はハンブルク市から受け渡されたが、売ってはいけないという規制がある。

土地の賃貸事業については、バースに5日間寄港する場合、ONEクラスの貨物船で2万4千～5千ユーロで、約60時間で荷物の積み下ろしができるように組んでいる。港湾の土地の賃貸事業は、全事業のうち3番目の売り上げである。土地の管理はHPAが行い、荷物やクレーンの管理はそれぞれの事業者が行うという役割分担となっている。また、契約期間は10～30年ほどとなっていて、どれぐらいの税収になるのか、雇用の数、どれほどの投資が必要になるかなど、それがどれほど重要なテナントであるかによって決まってくる。また、ハンブルクの港は鉄道インフラが整備された港としても知られている。



（ガントリークレーンが整備された岸壁）

【主な質疑】

Q. ポートセールスは誰がするのか。

→需要が多いので、セールスの必要性がない。

Q. ものすごいコンテナの数だが、荷物を下したあとトラックはどこへ行くのか。

道は渋滞しないのか。下した荷物はどのように処理されるのか。

→貨物列車の割合を増やしていきたいが、どうしても3分の1ほどの貨物はハンブルクから118kmの範囲でまた次の運送に引き渡しということが多いため、短距離のものはやはりトラックに載せることしかできない。特に木曜日の午後は週末に向けてトラックの荷物を下す最後のチャンスとなるので、非常に交通量は多くな

る。

Q. 今日は日曜日だから交通量はそんなに多くないのか。

→基本的に港は週 7 日間 24 時間動いている。元日、イースター、5 月 1 日の労働の日など、休みは年で 5 日間だけである。

在ハンブルク日本国総領事主催意見交換会

戸田在ハンブルク日本国総領事、大西首席領事と意見交換を行った。今後ますます万博広報活動を協力して取り組んでいくことを確認したほか、総領事より、ハンブルク市（州）の概要について次のとおりご説明いただいた。

【概要説明】

ハンブルクは市でもあり州でもある。面積が755km²で大阪府の約4割、人口が191万人でドイツ第2の都市である。

政治面では、ペーター・チェンチャー市長は2018年3月に州首相及び市長に任命され、2020年に再任し、現在、就任6年目である。来年3月には選挙が予定されている。

経済面では、港湾物流分野の産業が盛んであり、欧州第3位の国際貿易港を有する。近年では航空産業、風力発電等再生可能エネルギー、ライフサイエンス等付加価値の高い産業が集中している。GDPは1,506億ユーロで全独中3.7%、一人当たりGDPは79万ユーロで全独中1位であり、在留邦人数は1,356人、進出日系企業数は75社である。日本の地方自治体とは連携覚書による分野別協力が進んでおり、神戸市と環境、エネルギーなど、福島県とは再生可能エネルギー、水素分野などで協力関係にある。

都市開発面では、ハンブルクは総面積の約半分が緑地帯であり、約1割がアルスター湖をはじめとする水域で占められ、水と緑の都と言われる。近年港湾地区の再開発が進んでおり、目玉はコンサートホールのエルプフィルハーモニーである。

在留邦人コミュニティについては、日系商工会議所が存在せず、在ハンブルク日本企業間のネットワークが代わりの役割を果たしているとのことだった。

文化交流では、ハンブルク独日協会などの友好団体が活動をされており、主なイベントとしてはジャパンフェスティバルである。また、「日本＝花火」のイメージを持つ人が多いことから花火大会も行われているが、今年は寄付金が集まらず開催できなかった。

ハンブルクと桜について、1968年にハンブルク日本人会は明治100周年記念事業の一環でハンブルク州に桜を寄贈し、1980年以降、毎年桜の苗木が寄贈されており、5,000本を超えている。また、1968年から日独間友好親善大使の役割を担う「ハンブルクさくらの王女」が選出されている（2015年からは「さくらの女王」に改名）。

【主な意見交換】

- ・外国人労働者受け入れの現状と課題は。
 - ドイツはこれまで労働力不足を外国人労働者の受け入れによって対応しており、現在、幅広い層の外国人労働者を受け入れている。
- ・ドイツの中小企業の特徴は。

→日本では大企業との関係で中小企業は下請事業者として位置づけられていることがあるが、ドイツでは中小企業は独自の競争力を持つ強い存在である。

- ・社会保障制度について、介護が必要となった場合の制度として、日本では介護保険制度があるが、ドイツではどうか。

→ドイツでも介護保険制度があり、在宅や施設において介護を受けることができ、日本とよく似ている。

- ・年金制度について、日本では少子高齢化の影響により支給開始年齢が引き上げられ、現在は65歳であるが、ドイツではどうか。

→ドイツでも支給開始年齢は年々引き上げられ、現在は67歳である。

- ・日本では国民皆保険制度のもと、国民は公的医療保険に加入しているが、ドイツの医療保険制度はどのようなものか。

→ドイツでは公的医療保険だけでなく、民間医療保険もある。民間医療保険は比較的高収入の人が加入している。

ハンブルク市主催噴水ショー視察

プランテン・ウン・ブローメン公園において、ハンブルク市主催の噴水ショーの視察を行った。

同公園は、遊歩道や池、日本庭園もあるかなり広い公園であり、市民の憩いの場ともなっている。街の中心に位置し、多くの植物が植えられており、広大な緑のオアシスとなっている。

ハンブルクの日の入り時刻に合わせた噴水ショーは午後10時頃から始まった。遅い時間にも関わらず、多くの市民が夕涼みをしながら噴水ショーを観覧しており、人の集う公園としてもきれいに管理されていた。いろんな角度や大きさに飛び出す水にライトを効果的に用いて照らし、また音楽に合わせて揺らすなど、まさに市民を楽しませるためのショーとしての噴水であった。

噴水ショーのあと、すっかり日が沈み暗くなっていたが公園内を歩いて視察を行った。日本の公園に比べると街灯が非常に少なく暗く感じたが、犯罪はそれほど多いわけではなく今のところ治安面での不安はないとのことだった。



(噴水ショー視察の様子)

(広大なプラウテン・ウン・ブローメン公園の様子)

